

フランス語の発音習得における長母音の役割

Le rôle de la durée vocalique dans l'apprentissage du français

菊地 歌子
Utako Kikuchi

En français, la durée vocalique n'ont pas de valeur phonologique, elle n'est pas non plus signalée par un signe orthographique. C'est seulement le signe phonétique [ː] qui marque l'existence d'une voyelle longue. Pourtant, dans l'apprentissage de la mélodie de la langue française, la maîtrise de la voyelle longue est cruciale. Tenant compte de l'interaction du japonais où la durée vocalique est un élément distinctif, nous proposons des exercices utiles et efficaces pour la voyelle longue.

キーワード

voyelle longue (長母音) français (フランス語) intonation (イントネーション)
rythme (リズム) mélodie (メロディー)

フランス語には短母音と長母音が存在するが、母音の長さは音韻的価値を持たず、短母音と長母音は異音でしかない。しかも長母音は綴り字では判別はできず、唯一の表記手段は、発音記号【ː】である¹⁾。さらにプロゾディーの分析対象となる独立した要素ではないことも手伝って意識されにくい。しかしながら長母音は、アクセントのある音節にあり、特別に長く、良く聞こえるため、発話や朗読での、フランス語らしさという点では重要な役割を担う。長母音が見れる条件を知り、長母音を適切な音程と力の変化で発音できることは、フランス語らしさの獲得につながる。

一方日本語にも長母音が存在し、カタカナ表記では【ー】を使う。母音の長短は意味の弁別要素であり、また単語内での位置に制限がないなど、多くの特徴がフランス語の長母音とは基本的に異なる。本稿では、まずフランス語の長母音が見れる条件、非強勢化の重要性、音声の特徴を整理する。次に日本語の長母音とフランス語の長母音との分布や音声学的相違点を明らかにする。最後に、日本語の長母音をそのままフランス語の長母音に当てはめないための注意点をまとめ、フランス語らしい長母音のメロディーの習得法を提案する。ただしメロディーは言語学ではイントネーションや旋律と同義語と解釈されるが²⁾、長さが対象外となる。一方言

語治療の分野で使うメロディーは3つパラメーター：音程、長さ、強さで構成される。このため、音声の分析で音程の変化のみを対象とする場合はイントネーションを使用し、フランス語らしさの1要素として長さを対象に含める場合はメロディーを使用する。

なお日本語の長母音については、定義について様々な議論があるため³⁾、拍（モーラ）の問題や1つの長母音か2つの短母音かの問題などを排除するためにカタカナで【ー】を使って長母音と表記される語のみを考察の対象とする。短母音の例は、標準語のアクセントが安定している漢字で表記できる語を優先的に使用する。

1. 長母音の位置・分布

1.1 フランス語の長母音

1.1.1 長母音が現れる条件

フランス語の母音は、単語の最終音節が閉音節で以下の条件が満たされた場合にのみ長母音となる。

次の a, b のどちらかに該当する単語

- a. 音節を閉じる子音が[r z ʒ v vr]のいずれかであること⁴⁾。

例	[r]	[z]	[ʒ]	[v]	[vr]
	toujours	seize	page	cave	livre

- b. 母音が鼻母音[ɛ̃ ā õ]または[a o ø]のいずれかであること。

例	[ɛ̃]	[ā]	[õ]	[a]	[o]	[ø]
	cinq	trente	compte	pâtes	côte	neutre

該当する位置（語末の音節）にある母音は、上記の条件が満たされた場合（条件 a と b のどちらか、あるいは両方）は必ず長母音であり、短母音にはならない。逆に条件 a, b のどちらでもなければ長母音にはならない。したがって長母音と短母音は異音であり、母音の長さの違いで対立するミニマルペアは存在しえない⁵⁾。

例

a が欠ける（子音が違う） 例 seize [sɛːz] / sec [sek]

b が欠ける（母音が違う） 例 cinq [sɛ̃ːk] / sept [set]

1.1.2 前提条件の変化：非強勢化

上記の条件はその音節が語末の閉音節という2項目、すなわち音節の構造と単語内での位置とを前提とする。

まず音節の構造については、開音節の母音は長母音になることは決してない。この前提は単語が単位であるため、該当する音節がアンシェヌマンにより偶発的に開音節になっても長母音は保たれる。あくまでも長母音の現れる条件は単語の単位を基本とする。

	閉音節 → 長母音	開音節 → 長母音
例	quinze [kɛːz]	quinze / en tout [kɛː zɑ̃ tu]

次に語末の音節であることが前提条件になるのは、そこがアクセントのある音節（強勢のある音節 syllabe accentuée）だからである。語末の音節以外は、アクセントが置かれることは決してないので、syllabe inaccentuée（非強勢音節）と呼ぶ。各単語が文中でリズム・グループ（意味の最小単位）の最後以外の位置にあると、語末の音節にはアクセントは置かれない。したがってその音節は syllabe accentuée から syllabe désaccentuée（非強勢化音節）に変わる。

長母音で終わる語が単独で発音された場合、長母音はそのまま維持される。しかしアクセントを担わない位置に置かれると非強勢化の現象により、語末の長母音は短母音（時に半長母音）になる。

	アクセントのある位置 → 長母音	アクセントのない位置 → 短母音
例	je pars [ʒə paːr]	je ne pars pas [ʒən par pɑ]

もし非強勢化によって短母音になるべきところで長母音のまま発音するとリズム・グループが切れることになり、意味が変わる場合さえある。

例 trentе cinq [tāt sɛːk]と読むと 35、[trāːt sɛːk]読むと 30, 5 となる。

この非強勢化による長母音から短母音への変化は、発話や朗読において、全体のリズムとメロディー⁶⁾という言語の最も基本的な特徴を決定づける。したがって長母音・短母音の違いは、フランス語らしさの習得には不可欠な知識であり、重要な練習項目である。

ところが日本語では母音の長さは単語の意味に関わる音韻的要素であり、単語の長母音、短母音が位置の違いによって交代することはない⁷⁾。そのため日本人学習者は、長母音を非強勢化によって短母音で発音すべき場合でも、単語として覚えた長母音を維持する傾向が見られる。以下手短かに日本語の長母音の特性を整理し、母語の干渉を確認する。

1.2 日本語の長母音の特性

1.2.1 長母音の位置

日本語の音節は基本的にすべて開音節であり、必然的に長母音はすべて開音節にある。さらに単語内での位置の制約もない。

例 カー キー ヒーター イントネーション モータリゼーション

日本語の長母音は音韻的価値を持ち、母音の長さで対立するミニマルペアが存在する。

例 カー／蚊 キー／木 アート／後 カード／角 ヒーター／日田

特に母音の長さで対立するミニマルペアが存在する語は、文の位置によって短母音に変わることはない。日本語では母音の長さが単語に固定されているというこの特徴は、フランス語のリズムの習得においては母語の干渉として特に注意すべき点である。

1.2.2 カタカナ表記による変形

外来語を表記する際にカタカナを原語の音に近づける工夫の一環として、短母音が長母音として表記される場合が少なくない。逆に長母音を短母音として表記する例は鼻母音が多く、数は限られている。

例 短母音 → 長母音

étoile エトワール beaujolais nouveau ボージョレヌーボー

études エチュード Nice ニース gâteau ガトー écho エコー

長母音 → 短母音

France フランス renaissance ルネサンス Victor ヴィクトル

このような短母音と長母音の任意の変換は原語の単語の発音習得に影響する。たとえば、短母音の *étude* は日本語になった「エチュード」の影響で、長母音で発音されやすい。しかしこのような母音の長さの違いは、フランス語では意味の違いが発生しない純粋な発音上の問題でしかないために、指導の対象になりにくい。

2. 長母音の音声学上の特徴

2.1 母音の長さ

フランス語も日本語も平均的には長母音の方が短母音より長い⁹⁾。しかし、長さは決定的な弁別要素ではなく、フランス語では母音の音程（音色も伴う）が途中で変化することが決定的な弁別要素となる¹⁰⁾。日本語でも長さが「範疇的知覚」の要素であるという報告がある一方「ピ

ッチ（音程）の下降開始時点が長短の知覚に関与する」という報告もある¹¹⁾。

フランス語と日本語の長母音の音程の変化の仕方は共通点もあるが、大きな相違点があることを具体例の音声分析で検証する。

2.2 イントネーション

イントネーションは音程の変化であり、以下の音響分析ではピッチ曲線（図1の下段、↑の位置から始まる色の濃い線）で表される。

2.2.1 フランス語

フランス語の長母音の音程は、音節の中で変化する。長母音で終わる語を単独で発音する場合、母音から子音までは下降イントネーションで発音され¹²⁾、図1が示す通り音程は曲線状に変化する¹³⁾。長母音で終わる単語が文中のリズム・グループの最後にある時、通常は上昇イントネーションで発音される。この場合も音程はやはり音節の中で変化する、下降イントネーションとほとんど対象形の上昇パターンを示す。

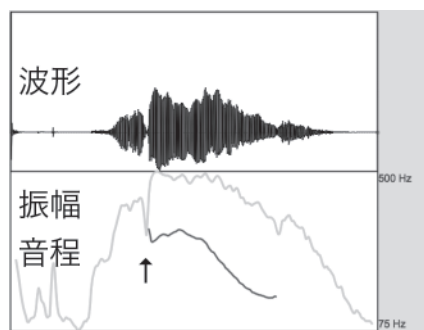


図1 sauce 下降イントネーション

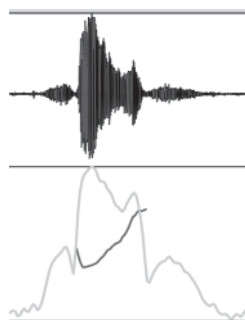


図2 sauce 上昇イントネーション



図3 Très impressionnante の -nante[nã:t]

図3にネイティブによる通常の発話の分析結果を示しておく。“très impressionnante”という音声で、最後の[nã:t]に長母音がある。ピッチ曲線（音程）が上昇イントネーションであることを示している。

フランス語の長母音のイントネーションは上昇・下降のパターンがあり、いずれも音節の中で変化する。日本語の音程の変化は音節の単位で変化するため、特に下降パターン以外で大きな違いがある。以下では日本語の長母音の音響的特徴を検証する。

2.2.2 日本語

日本語の長母音のイントネーションは、基本的に音程の変化が単語で固定され¹⁴⁾、多くは下降イントネーションで発音される。下降ではない場合を上昇パターンとして分類しておく。

例 下降イントネーション：ビール テープ クーラー イントネーション
 上昇イントネーション：メール レール ページ テーブル メーター

図4は下降イントネーションで発音された「ニュース」で、[njw:sw]と発音記号で書かれる。実際の発音では語末の母音が無声化し、図4のように[njw:s]と発音される傾向がある。[njw:]の部分は後続の[s]に向かって音程が下がる。フランス語と比較すると音程の降下が幾分速く、直線的であるという違いが見られるが、イントネーションのパターンとしては酷似している。

一方上昇イントネーションに分類した語は、図5、6が示すように、母音の音程の変化は下降パターンと対照的な形の曲線にはならない。ほとんど一定レベルを保つか、母音のある時点で一度上昇するのみで母音全体で上昇を続けることはない。

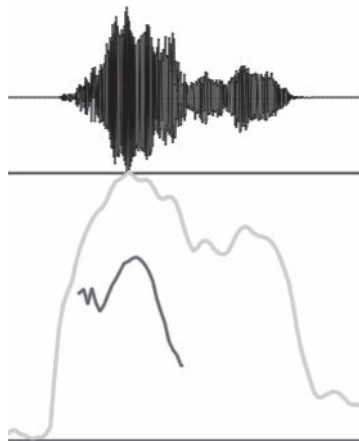


図4 ニュース

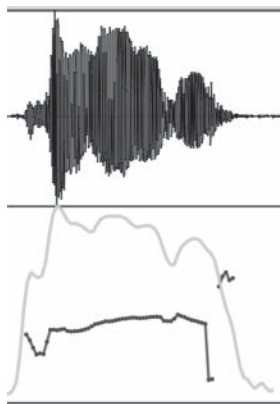


図5 レール

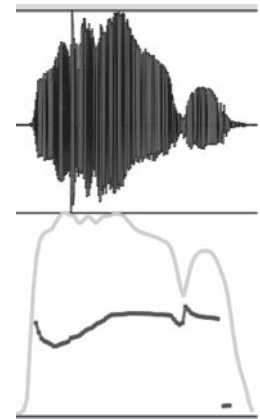


図6 メール

3. イントネーションと力の関係

これまでみてきたイントネーションは声がある部分の音程を測定している。力は呼気の強さを測定するため、無声の部分でもグラフに表示される。上記の図1～6で、音程を表すピッチ曲線の上にある曲線が音響分析の *intensité* (強さ) を表し、最上段の波形の振幅に対応する。図1では2つの曲線はほとんど平行し、図2では反比例になっている。つまりフランス語ではイントネーションに関係無く、長母音は力が減少しながら発音されることが確認できる。これに対し、日本語の長母音は下降パターンでは力が減少するが、上昇パターンでは力は減少しな

い。

フランス語の長母音と短母音の対立を保障する音声学的要素は、イントネーションの上昇・下降に関わらず、母音の途中での力の減少であり、その結果音色の変化を伴う（図1～3参照）。日本語の長母音は、下降イントネーションの場合は力の減少を伴うが（図4参照）、上昇イントネーションでは、ピッチ曲線が曲線を描きながら上昇することもなく、明らかな力の減少も認められない（図5、6参照）。

フランス語と日本語の長母音には、＜下降イントネーションではフランス語、日本語どちらも音程の低下と平行して力が減少する＞という共通点がある。しかし＜上昇イントネーションでは、フランス語では音程が明瞭に上昇し、力は減少する。日本語ではイントネーションも力も一定に保たれる＞という違いがある。この違いは、複数のリズム・グループのある文で特に問題となる。フランス語の文が複数のリズム・グループで構成されている場合、基本のイントネーションは以下の図7のように、上昇、上昇、下降となる。

図7



したがって、日本人学習者にとって、上昇イントネーションの長母音で終わる文中のリズム・グループは、特別な注意をして丁寧に練習をする必要がある。

4. 長母音の練習・指導

以上の観察結果から導かれる長母音の練習は、以下の要点で総括される。

- 1) 下降イントネーションでは、日本語の長母音を出発点として、より長く、音程の変化をより緩やかにする練習することで、フランス語らしい長母音が習得できることが予想される。この練習は、下降イントネーションのみを取り上げるために、単語を単独で発音する形ではじめ、次の段階で複数の単語を含む1つのリズム・グループの慣用句や挨拶などで練習を続ける。また、語末子音のあとに母音が追加されないように注意する必要がある。日本語では文末の「ス」や「ズ」の母音が無声化あるいは完全に脱落する傾向があるので、これを利用して、sauce, douze など[s]や[z]で終わる語や文を使う。
- 2) 上昇イントネーションの場合は、慎重に練習を組み立てる。日本人学習者は、上昇イントネーションを意識すると、語末の音節のはじめで急激に音程をあげる傾向があるので、はじめは1音節内でイントネーションを上昇に向かう練習から始める。次に音程をあげると同時に力を弱める練習を追加する。具体的には以下のように、3段階に組み立てる。

第1段階：長母音のある音節の中で緩やかに音程をゆっくりと上げる練習：sauce, quinze など1音節語で構造も単純な語を使う

第2段階：2音節で、最後の音節の音程を緩やかに上げ、次に少し速度を速める練習：la sauce, le quinze など〈冠詞+名詞〉の形を使う

第3段階：できるだけ単純で機械的に繰り返すことが可能な素材で音節の数を2つから3つへと増やす練習：je chante, vous chantez; quarante, quarante-huit

力の変化は、一度力を入れてから急速に弱める形で練習をする。たとえば chanter の活用の場合 [ʒə fɑ:t] の [fɑ:] の子音の初めの部分でグンと力を入れ、そのあとふっと力を抜くイメージ (ブランコを漕ぐ時の力を入れるタイミングなど) で練習する。

最後に

発音の習得は模倣に始まる。模倣をしながらモデルの音声を良く聞いて自分の発音と聞き比べながらモデルに近づいてゆければ上達する。しかし模倣だけでは埋まらない溝がある。それを超えるためにはまずフランス語と日本語の違いを良く観察し、フランス語に近づく模索をする。そうすることで、より効率的な発音習得・指導が可能となる。フランス語らしさの習得には母音や子音から始まって音のつなぎ方など随所に有益なコツが隠れている。耳をすませてモデルと自分の発音を聞き比べるとフランス語らしさに近づくための新たなヒントが見えてくるはずだ。

注

- 1) 長母音の記号は『プチ・ロワイヤル仏和辞典』第4版・CD-Extra付き (2010, p.1667); 『小学館ロベール仏和大辞典』では使われている。また『スタンダード佛和辞典』(初版1957、第5刷2000; 大修館書店)では使われているが、『新スタンダード仏和辞典』(初版1987)では削除されている。
- 2) Dubois et al. (1994, p.385) “Le terme prosodie se réfère à un domaine de rocher vaste et hétérogène, comme le montre la liste des phénomènes qu’il évoque : accent, ton, quantité, syllabe, jointure, mélodie, intonation, emphase, débit, rythme, métrique, etc.”
- 3) 田窪行則他 (2004, p.30); 窪蘭晴夫 (1999, p.195)
- 4) Delattre (1966, p.106)
- 5) Durand (1946, p.9)
- 6) MIT (Melodic intonation therapy) を元にフランスで開発された TMR (Thérapie Mélodique et Rythmée) で使用される2つの基本要素。
- 7) 最近長母音を短母音にして、コンピューターよりコンピューターなどと書く傾向があるが、長母音の位置や単語の長さなど制約がある。
- 8) 川上葵 (1987, p.26)

- 9) フランス語：長母音の平均 32.1cs、短母音の平均 16cs (Hugo cité par Durand, 1949, p.16) ; *serre* 42,6 / *sep* 14,2 (Delattre 1966, p.120)、日本語の母音の長さに関しては藤崎博也・杉藤美代子 (1977 p.81) が、連続する 2 母音のわたりの長を測定し、0,156 ~ 0,168 sec[15,6 ~ 16,8cs]が短母音と長母音の判断境界の値であると報告している。
- 10) Durand (1946, p.43) “Chez tous les sujets d’expériences étudiés, les durées des deux *An* de *grand/grande* n’étaient pas nécessairement différentes, [...] Ce qui différenciait, chez tous les sujets, les deux quantités vocaliques, c’est que la brève était dite sur un ton uni ou légèrement montant alors que la longue était dite sur un ton nettement descendant. [...] ces deux couples [brève/brève et brève/longue] ne diffèrent pas par les mesures, mais bien par le mouvement musical des voyelles [...]”
- 11) 益子幸江 (2005, p.29)
- 12) Durand (1946, p.9) “Soient par exemple les mots *neuve, grande* : les voyelles en sont nécessairement longues, celle du premier mot, car elle est suivie d’une consonne allongeante, celle du second mot comme nasale suivie de consonne. Il est donc hors des possibilités phonétiques du français d’établir une distinction entre deux mots *neuve* s’opposant par un *œ* long et un *œ* bref.”
- 13) この音声分析は筆者がゆっくりと発音した音源を使っている。
- 14) 例外：上昇・下降が定着していないツール、ブースや、合成語で変化する「メール／迷惑メール」など。

参考文献

- 川上 葵 (1987) 『日本語音声概論』第 9 刷, 桜楓社
- 窪 蘭晴夫 (1999) 『日本語の音声』(現代言語学入門 2) 岩波書店
- 田 窪行則他 (2004) 『音声』(岩波講座 言葉の科学 2), 第 2 刷, 岩波書店
- 益子幸江 (2005) 「日本語の長母音の長さについての音響音声学的考察—音声レイヤーの提案—」『語学研究所論集』第 10 号 15-34
- 藤崎博也・杉藤美代子 (1977) 「音声の物理的性質」『岩波 講座日本語 5 音韻』岩波書店 63-106
- Delattre (1966) : Rapport entre la durée vocalique, le timbre et la structure syllabique en français *Studie in french and comparative phonetics*. La Hay: Mouton, pp.105-110
- Delattre (1966) : Durée consciente et durée inconsciente des voyelles *Studie in french and comparative phonetics*. La Hay: Mouton, pp.120-121
- Dubois et al. (1994) *Dictionnaire de linguistique et des sciences du langage*, Larousse
- Durand (1946) : *Voyelles longues et voyelles brèves : Essai sur la nature de la quantité vocalique*. Paris : Librairie C. Linchsieck

